

現代舞踊家ケイ・タケイ (KEI TAKEI 武井 慧, 1939-) 研究 -代表作《ライト(Light)》シリーズの作品分析を中心に- Characteristic Study of KEI TAKEI's Dance Series "Light"

細川江利子 (教育学部・教授)

Eriko HOSOKAWA (Faculty of Education, Professor)

1 研究目的および方法

ケイ・タケイは、日本でモダンダンスの先駆者の一人である檜健次(1908-83)に師事した後、1967年に渡米し、91年に帰国するまでの20年余りに渡ってニューヨークを拠点に活動し、国際的な評価を得た日本人現代舞踊家である。その代表作《ライト(Light)》は1969-96年の27年間に渡って創り続けられた31のパートから成る、世界でも類を見ないシリーズ作品であり、その独自性が高く評価されている。以上の点から、筆者は、タケイを研究上意義のある舞踊家であると考え、継続的に研究をすすめてきた。

作家・作品を対象とした研究では、舞踊思想(作家)、作品、批評・評価(享受者)の3つの位相からの研究が考えられるが、本研究では特に、これまでの研究で不十分であった作品分析に焦点をあて、《ライト》シリーズの代表的パート、5作品を対象とし、その作品特性を明らかにすることを目的とした。

対象作品は、《ライト》シリーズの初、中、後期を代表する5作品、《ライト、パート5》(初期)、《パート12(石の畑 The Stone Field)》および《パート18(麦畑 The Wheat Field)》(中期)、《1人の女の巡礼(One Woman's Pilgrimage) -パート25》および《1人の女の死(One Woman's Death) -パート26》(後期)とした。

研究方法は、作品VTR分析を中心に、文献研究およびインタビューとし、以下の手順により研究を行なった。

- (1)各作品を対象とし、作品VTR分析により、作品構成要素である場面構成と展開、動き、空間構成、音楽・音・声、衣装、小道具・装置、身体(ダンサー)について実証的に明らかにした。
- (2)(1)の結果について、タケイの創作意図や舞踊観、および国内外の公演批評文とつきあわせながら検討を加え、各作品の特性を総合的に考察した。
- (3)最後に、各作品の特性を比較し、共通性(基本的特性)と差異性(時代における変容)について考察した。

2 研究結果および考察

紙面の都合上、各作品の特性(上記(2))については省略し、比較考察した結果についてのみ報告する。

(《12(石の畑)》の研究成果については、細川(2006)ケイ・タケイの作品《ライト、パート12(石の畑)》(1976)の特性(社)日本女子体育連盟学術研究23:35-50.を参照のこと。)

まず、5作品のVTR分析結果(表参照)を比較考察した結果、以下の共通性が明らかになった。

- ① 作品を特徴づける、限定的な場面や動きを用いていること。
- ② その限定的な場面や動きを反復していること。
- ③ 動きはいわゆるダンステクニックではなく、日常的な動きや自然な動きを形式化して用いていること。
- ④ 小道具や装置の使用、ダンサーの配置により、視覚的效果の高い空間を形成していること。
- ⑤ 小石、麦、木の枝、枯葉といった自然の事物から得た小道具や装置を用いていること。
- ⑥ 音楽だけでなく、ダンサーの歌や声、音を効果的に用いていること。
- ⑦ 白い木綿の衣装を基本として用いていること。

そして、以上のような共通性を持ちながらも、以下のような変化(差異性)が中・後期になるにつれて見られることが明らかになった。

- ①動きの種類・構成が複雑化していること。
- ②白い衣装を基本としながらも、より装飾的になる、あるいは全く異なる衣装を用いていること。

③動きを反復するのみであったのが、何らかの感情を表現する動きが加わったこと。

④感情を表現する動き、装飾的になった衣装や小道具により、作品内容についてより説明的になったこと。

表 5 作品の概要と作品構成要素別特性 (細川作成)

作品名	《5》	《12(石の畑)》	《パート18(麦畑)》	《1人の女の巡礼(25)》	《1人の女の死(26)》
初演年	1971	1976	1983	1988	1988
出演者数	3(男2、女1)	11(男4、女7)	8(男3、女5)	2(女2)	1(女1)
人的構成	群	ソロ(女)、群(男4、女6)	ソロ(男)、ソロ(男)、群	ソロ(女)、介添え(女)	ソロ(女)
時間	20分35秒	21分14秒	49分27秒	11分53秒	20分20秒
衣装	白い木綿の上下。	白い木綿の上下。前身ごろに黒い1本のライン。ソロの女のみ、顔に大きなバツ印が墨で描かれている。	白い木綿の上下。墨で太めの線の模様あり。群の口元に口を封じよう線が墨で描かれている。	白い木綿の上下。「悪魂」と書かれた袖無し羽織、銀色の布袋、赤いふんどし。	量感のある黄土色の着物。中に多量の枯葉が仕込んであり、糸を引くと枯葉が落ちる仕掛け。
小道具・装置	なし	多量の小石	麦の絵の描かれた布。畑の柵。		
音楽・音・声	Marcus Parsons IIIによる音楽。パーカッションの激しいリズム。	音楽なし。石を打つ音・石が転がる音・床に落ちる音。女が歌う「あなたがたどこさ」。群のかけ声。	David Mossによる単調な電子音。男が歌う「五木の子守唄」。かけ声。	音楽なし。介添えのかけ声。女の声。	ツジ・ユキオによる音楽。尺八、ししおどし、鈴、風の音、男の声明等が入った情緒的な音楽。女の泣き声、咳。
動き・構成の概要	3人が支え合い、空に向かって立ちあがる、崩れ落ちる。その繰り返しのみ。	女の歌をきっかけに群が舞台上(畑)に集まり、石を打ちながら踊る・床の石を並べ替える小場面を繰り返す。女は、常に石を並べ替えている。途中、再び女が歌を歌い、女は別の畑(舞台外)に向かい(畑を追われ)、群はその後に続く者と畑に残る者とに分かれる。	農場主、あるいは農夫のリーダーを思わせる2人の男。農夫達(群)が畑に集まり、男たちの指揮下で労働し、最後は農夫達が畑から逃げ出す中、2人の男が争う。	女が、介添えの老婆から着せられたものを身から剥ぎ取る、その行為を3回(羽織、袋、ふんどし)繰り返す。最後、ふんどしを腰から下げたまま、天に向かって手を伸ばす。	女が登場し、枯葉を落としながら踊る。動きは徐々に弱々しくなり、枯葉が落ちるにつれ着物も薄くなっていく。最後、女は座り込み、足をかすかに動かすのみになる。
場面構成と展開	場面転換なし。	2場面(21小場面)構成。	11場面構成。	4場面構成。	明確な場面転換なし。
動き	限定的な動きを反復	女と群、それぞれが限定的な動きを反復。	各場面ごとに、限定的な動きを反復。	限定的な動きを反復。4場面目のみ、異なる動き。	動きの種類は多く、作品全体を貫く動きの反復は見られない。
空間構成	舞台中央板付きで始まり、その場で踊る。	小石でつくったセンターの小円と、それを囲む大円。この大円が、作品の進行に伴い、形(模様)を変えていく。女と群は、この小石でエリアを分けて、それぞれ踊る(動く)。	上手に麦の絵の布が積み重ねられ、1人の男は布を丸めている。もう1人の男は3方に柵をつくる。群は、柵の中で踊る。	介添えの老婆は、舞台最前部中央に、舞台の方を向いて正座。タケイはゆっくり歩いて老婆の前に行き、何かを身につけられると、それを激しい動きで剥ぎ取る。老婆のかけ声で、再び老婆の前に行く…。	観客席中央通路より、ゆっくり舞台に上がり、舞台上で踊る。

タケイは、自身の創作方法について、まず「ビジュアルなイメージ」(例えば、石)が強くある。それを信じて、ヒューマン・アニマル(人間の一番根底的な所、つまり動物、自然。)としての身体が「直感的な動き」で反応していく。そこに「人間ドラマ」が生まれるのだと説明する。従って、作品の見通しを持って、論理的に創作を進めるといったことはない。信じたものだけに従って創り、作品を踊っていくうちに、ああこうなのかなって真実が見えてくる。それが好きな舞踊だという。

批評家達も、《ライト》は、意味を限定せず、見る者のイメージを喚起する隠喩的作品であると高く評価する。例えば、《5》について、タケイのイメージは「木とつる」であったが、アメリカの批評家 Tobias(1981)は「この場面の解釈は、キリストが十字架から降ろされるどころというものから、『広島』の惨状、運命を押しつぶしてしまう力のもとでも征服されない人間性というものにまで及ぶ。…タケイのイメージの持つ変幻自在な特性は彼女の強みであると思う。」(EXCAVATIONS.New York.May 18:65)と評している。

しかしながら、VTR 分析の結果、《ライト》は中・後期になるとより装飾的、説明的になってきていることが明らかになった。それを感知したからこそ、タケイは、後期になると群舞をやめてソロという自らの身体に戻り、さらには《天空への旅(31)》(1996)という群舞作品を最後に《ライト》に終止符を打ったのであろう。今、タケイは、「真実の舞踊」を求めて、再びソロ活動を通して自らの身体と向き合っているという。

《ライト》シリーズを研究するという事は、単なる作品研究に留まらず、ケイ・タケイという1人の舞踊家の創造の軌跡を明らかにすることでもあり、非常に興味深い。本研究の成果をもとに、さらに研究を深めていきたいと考えている。

